

# 昭和戦前期における郷土研究の組織化

——橋浦泰雄の人脈構成に見る——

鶴見 太郎

## 一 はじめに

一九三〇年代から本格化する柳田民俗学の地方への浸透は、そのまま現在の日本民俗学の基盤を作ったといっても過言ではない。

柳田国男の民俗学に対して橋浦泰雄が果たした役割については、戦前戦中の郷土研究に直接携わった同時代人によって、すでに幾つかの回想がなされている。<sup>①</sup> それらの多くは、細かに地方会員と接触し、戦時下において『民間伝承』編集長の重責を果たし「民間伝承の会」を支えた人物として描かれており、郷土研究組織の形成という観点から多大な影響力を持った点が強調されている。一九五〇年に日本民俗学会は多年の学界に対する功績として柳田、折口信夫と並んで橋浦を名誉会員に選出しているが、これ自体、長年にわたる橋浦の労に報いるものだった。

しかしながら、当の橋浦がどのような方法意識をもって組織化に對したのか、その内実については、依然として未説明の部分が多く、

## 昭和戦前期における郷土研究の組織化

橋浦その人に接したことのある人物たちによって、その誠実・実直さが回想されるに止まっている。橋浦の経歴が社会運動史、民俗学史の双方にわたっていることが、この場合、却って橋浦の俯瞰図を得ることを難しくしている。

小論の目的は、橋浦の思想行程を彼の人脈に関する特徴が形成された大正期に求め、一九二〇年代後半から敗戦までの中心に、そこで展開された人物交流を検討することで後年、郷土研究の組織化に深くかかわっていった橋浦の思想・方法を抽出することにある。その際、資料としては橋浦が遺した「橋浦泰雄関係文書」（以下、「文書」と略記）に多くを負うこととする。<sup>②</sup> 橋浦自身は郷土研究についてまとまった組織論を展開することはなかったが、「文書」に含まれている彼が計画した幾つかの事業関連資料、ならびに地方研究者からの来信を検討することでそこに一定の交流様式を読み取り、捉えにくかった橋浦の組織に対する取り組みに肉薄することが小論の課題である。

なお、文中で「組織化」という言葉を使う場合、小論では橋浦が

自らの組織化に関する手腕を郷土研究に発揮した時期に限ることとする。無論、橋浦の活動範囲は明治末の郷里鳥取における同人誌にはじまり、大正末のプロレタリア文化運動、消費組合活動、その他散発的に行われた地域サークル活動と広域に及んでいることから見れば、必ずしも妥当とは言いがたい。しかし少なくとも一九二〇年代後半から敗戦前後にかけて一貫して橋浦がかかわってきた組織化とは、郷土研究であったこと、また後述するように橋浦が他の運動で得た人脈が多くは戦中・戦後の「民間伝承の会」に収斂していくことを考えて、敢えてこの方式を採用する。

## 二 大正期の人間把握

大正期の橋浦を大きく規定した人物の一人に有島武郎がいる。<sup>3</sup> 両者を引き合わせたのはかつて東北帝国大学農科大学で有島に学んだ実弟の橋浦季雄であった。文学史の上では、橋浦との邂逅がやがて「惜しみなく愛は奪ふ」(一九二〇年)へと繋がっていくこととなるが、すでに鳥取文壇では知られた存在であるものの、中央では全く無名といつてよい橋浦との交流を何故、有島が亡くなるまで尊重し続けたのかは、自身の「家」からの離脱を晩年の課題とした有島を考慮するとしても、多少考証の余地が残っている。

ひとつの切り口になるのは、有島の知遇を得て以降も橋浦は、有島の側が要望する場合を除いて、自らが所屬する運動ないし団体に

有島を誘わなかったことであろう。両者が参画した文藝懇話会・初心会にしても、たまたま有島が審査委員をしていた『大阪朝日新聞』懸賞小説に一九一七年末、野村愛正(當時は千茅)が書いた「明けゆく路」が当選し、それを祝う席で結成の話が持ち上がったのであり、会名も有島が率先して自ら付けるなど、むしろ有島の自発性の方が目に付く。<sup>4</sup> ここから看取されるのは、橋浦は有島を通して自分が上昇を遂げようとする志向を持っていないことである。両者を結びつけた思想的要因に、橋浦が青年期、郷里で接したクロボトキンの「相互扶助論」があったことは知られているが、その一方で有島が自身を政治的に利用するという野心からおよそ無縁な橋浦の氣質に寄せた信頼感があったといえよう。

こうした橋浦の氣質は一九二五年、柳田国男の知遇を得た時にも、同様に発揮されたと見られる。よく知られている通り、柳田は就職の斡旋など、個人的な便宜をはかる依頼を受けることを極度に嫌っており、しばしばそれに端を発して旧来の知己と関係が悪化するところが少なくなかった。しかし柳田との関係においても、橋浦が同種の依頼を立てた形跡は見当たらない。戦時下、「民間伝承の会」運営で孤軍奮闘している橋浦の生活を援助する意味で柳田が渋沢敬三を通じて、当時渋沢が編纂中だった「絵引き」の挿絵を書く仕事を世話したことがあったが、これも柳田の側から行ったことであり、後述する絵画頒布会にしても、柳田の方が積極的に推薦文を寄せたものだった。互いに依って立つ思想とは別個に、柳田が終始橋浦を信

頼し続けたのは、かつて有島に対したような自身の領分を頑なに守ろうとする橋浦の姿勢に多くを依っている。

その橋浦が一九二〇年代初期のアナ・ボル論争においてとった態度を見ると、少なくとも運動史の上では次第に当初のアナキズムからボル派としての旗幟を鮮明にしていたことは、その後のプロレタリア文化運動における足跡に照らしてみても、ほぼ間違いない。しかしその一方で、こと一個人に対する信頼、評価にかかわる問題や、自身が深くかかわった事業が運営上の重大な局面をむかえた時、依然としてアナキズム的な気質を発揮した。

その端的な例が一九二〇年四月、黒耀会第一回展覧会の準備に際して橋浦が示した方針である。黒耀会は一九一九年に結成された革命芸術研究茶話会を改称した草創期プロレタリア運動団体であり、当時大杉栄をはじめ、多くのアナキストを含んでいた。開会を控えていた時、出品された絵画彫刻を審査するか否かが、問題となった折、これを有島武郎に審査員にする意見が大杉から提出されたところ、橋浦は望月桂とともに、芸術とは本来、競争によって評価されるべきではない、との見地から反対意見を述べ、いたずらに周囲の関心を惹き付けるため、趣向を凝らす必要のないことを訴えた<sup>5</sup>。結局この案が通り、これが同会の基本となった。

こうした価値判断は、すでに橋浦が自身を「ボル派」と規定した後、大杉栄に対して見せた姿勢にも明確にあらわれている。震災当時、自宅のあった野方村で被災した橋浦は、直後から東京市内の親

戚、友人たちを安否確認のため、徒歩で見舞っていたが、九月十一日に震災前から体調を崩していた足助素一を叢文閣に訪ねたところ、たまたま同じ目的で居合わせた大杉と交歓する機会があり、互いに再開を約して分かれた<sup>6</sup>。大杉が憲兵隊司令部で虐殺されたのは一日であった。足助と橋浦は有島の死後も肝胆合い照らす仲であり、その友を見舞ってくれた大杉に橋浦が政治的な立場を超えて、その人物を認めたといえよう。

同時代の政治的趨勢とは別個に、絶えずその人物を個人として見る橋浦の姿勢は、昭和期に入って民俗学の組織化という新たな課題の中でより、鮮明に浮かび上がってくることとなる。

### 三 絵画頒布会

橋浦の人脈を見る上で、一つの指標となるのが絵画頒布会である。一九二〇年代から三〇年代にかけて社会主義運動の趨勢にかかわりなく頻繁に開催されたこと、また、頒布会の性格上、発起人ないし賛同人、そして一部には推薦文を一定の人士が寄せたことから、人脈の動態を知る上で的確な素材足りえる。

絵画に関連する事業で最も早いものは、一九二二年七月二日から四日にかけて牛込区矢来町の矢来倶楽部で行われた個展、同年十一月四日から七日に郷里・鳥取市内仁風閣で行われた個展が挙げられるが、絵画を買うという具体的な橋浦個人への賛意ないし援助から

生まれる求心力がその後の橋浦の人脈構成に大きく寄与した点で、そして購入者の名前が資料的に跡付けられる点で頒布会の占める位置は決して小さいものではない。

この一連の事業については、一九二八年五月の「小品画会」を皮切りに、一九三七年まで橋浦はおおむね年一回のペースで頒布会を行っている。そこに集った面々を見ると、呼びかけ人、賛同人がほぼ一定している以外に、年を追う毎にその外延が広くなり、参加する人員が着実に増えていることに特色がある。

「小品画会」の推薦者は秋田雨雀、足助素一、白井喬二、末光績、吹田順助、柳田国男が名を連ねている。<sup>①</sup>このうち柳田と鳥取時代の文芸仲間・白井以外は、いずれも有島武郎の知己であり、有島の死後、たびたび「武郎会」を通じて旧交を温めていた面々である。いずれも長期にわたって橋浦を知る人であり、御座なりに名前を貸した訳ではない。購入者は推薦者を除けば、運動関係で旧知の堺利彦、山崎今朝弥、市川義雄（正一の実弟）のほか、民俗学の関連で有賀喜左衛門、渋沢敬三、中山太郎、岡正雄、そして青年時代、鳥取で文士仲間だった吉村秀治を挙げることが出来るが、<sup>②</sup>当時橋浦が従事していた民俗学、社会主義運動の知己双方が互いに偏することなく、均衡を保って橋浦を援助していることが注目される。

「二・一五」事件の直後、全日本無産者芸術聯盟（ナップ）中央委員長の任にあった橋浦の絵画頒布会であることは、それだけ慎重を要するものだったが、翻ってみるならば、当事者が直接交流を図

ることによって積み重ねられた橋浦個人への信頼が、この事業の骨子となっていることが逆照射されているといえよう。その意味で橋浦の絵画頒布会はすぐれて経験的な人間関係を祖型としていることが分かる。

同様のことは、一九三〇年に六月一日から三にかけて鳥取市内鳥取商工奨励館で開催された「橋浦泰雄作品頒布会」についても当てはまる。もともと橋浦が帰鳥した理由は、五月に鳥取の自由社が文芸思潮講座を主催し、その講師として橋浦、秋田雨雀、尾崎翠、生田春月らを招いたことを契機とした。<sup>③</sup>橋浦は当地で「プロレタリア芸術の現勢」と題する講演を行っており、その余韻も冷めない時期に行われた頒布会は、明らかに郷里の人々にとってプロレタリア色の強いものとして受け止められたであろう。しかしその発起人には依然として柳田、秋田のほか、郷土出身の小説家として白井喬二と野村愛正、さらに現地からは前述の吉村秀治が名を連ねており、講演とは一線を画した運営設計だったことが分かる。

戦前期のマルクス主義者の多くが自らを郷土と切り離して運動に専心することが多かったのに対し、橋浦は自らの運動歴の浮沈にかかわらず、絶えず郷土と行き来していた。蓮仏重寿をはじめとする鳥取在住の民俗学者もこの交流の中から生まれることとなるが、こうした郷土との往還の背景には、運動と郷土研究の領分を守りつつ培われた人脈があったといえよう。

次いで一九三一年八月東京で行われた「橋浦泰雄作品頒布会」は、

事業の性格をほぼ、決定したものと見てよい。発起人は市谷信義、池上隆祐、小笠原洋々、折口信夫、岡村千秋、吉村秀治、田上義也、中川一政、野村愛正、胡桃沢勘内、久保清、柳田国男、矢ヶ崎栄次郎、秋田雨雀、白井喬二、島崎六九、吹田順介であるが、この配置は先述した有島人脈に今回、中川一政が入り、それに加えて新たに田上、小笠原、島崎など大正末、橋浦がしばらく北海道に移住した実兄の家業を手伝っていた時期に親交を結んだ同地の知己が登場している。それ以上に目立つのは池上、胡桃沢、矢ヶ崎（以上、信州松本）、久保（長崎五島）といった当時、すでに橋浦が画業ないし民俗学の实地調査に赴いた先で交流を重ねた人々が脇を固めていることである。<sup>⑩</sup>

この年の六月には『ナップ』誌上に蔵原惟人の「プロレタリア芸術運動の組織問題」が掲載され、中央協議会の強い指導力に基づいた強固な組織作りが標榜された。それを受ける形で同年一〇月にはナップ傘下の諸団体は、日本プロレタリア文化聯盟（コップ）へと再編された。

当時の橋浦は日本プロレタリア美術家同盟（AR）に所属し、コップの創立にも率先して参加しているが、頒布会の方は従前の支援者を維持したという点で、およそ運動とは異なる人脈で行われていた。それまでの頒布会が橋浦の縁故を中心に展開されたのに対し、今回は発起人がそれぞれ自身の領分から購買者に呼びかける形式がとられ、主だった者が橋浦の絵についてパンフレットの中でそれぞれ印

#### 昭和戦前期における郷土研究の組織化

象を綴った。発起人ならびに推薦文の諾否については橋浦個人から各人へ依頼が行ったものらしく、野村愛正は七月七日付で「画会の件、承知しました。早速認めて同封お送りします。こんなものでいいのですか。」との書簡を送っているし、長崎県五島福江の久保清からも七月八日付で、「御申越しの画会発起人、私でよければ御加へ下さい。そして御紹介の一文を別紙認めました。（中略）御取捨は御まかせします」と、やはり個人に宛てて推薦文を送っている。ここから判明するのは、頒布会の事務を他人任せにせず、橋浦が自身の手で行っていることである。さらにその中で橋浦が心掛けたのは、自分が関係者と対する際、それを組織という経路ではなく、絶えず自分と一対一の関係に換言して連絡を取り合い、その中で頒布会事業を運営しようとしたことである。自らの行程に即して参加者の一人ひとりに信頼を置き、その積み重ねによって事業を成功させるという、明快だがその実現に多大な労力を伴う方針がここで実践されているのである。それはまた大正期、同時代の政治変動とは別個に、自身の知己を経験に即して見極めようとした橋浦の姿勢を反映したものと見えよう。

#### 四 地方への組織化―信州松本―

柳田国男がはじめて傘下の弟子を持つ端緒となったのが、一九三三年九月から始まった連続講義「民間伝承論」であり、橋浦もまた

これを聴講した一人だった。この時の参加者がやがて談話会「木曜会」を形成し、これ以降、組織として柳田民俗学の中樞を担っている。

この中で柳田国男は、自らの民俗学を位置付けるにあたって、慎重にことばを選びつつ、敢えて「一国民俗学」という言葉を使った。数年來続いた「民俗学会」をめぐる折口信夫との確執がようやく終息しつつあった当時、柳田は直接自身が指導する弟子たちの養成に乗り出すとともに、自らの民俗学の体系を急いでいた。本来、異民族への強い関心を持ちながら、敢えて柳田はここに自らの対象を限定し、その枠内で民俗語彙を媒介とした調査の教授を摸索しはじめた。組織化という言葉が民俗学に適用される場合、それはこの方針をいかに地方末端まで行き渡らせるかと同義であったといえよう。

その柳田が、「民間伝承論」に先駆けて、すでに組織化に着手していた土地が長野県東筑摩郡だった。信州は柳田にとっても、特別の位置を占める地域である。それは単に養家である柳田家が信州飯田藩の出身だったことに過ぎない。具体的な要因は、同地に柳田が最も嚮望した郷土史家の一人・胡桃沢勤内が長年にわたって松本市及びその周辺地域で同好の士による親交を独自に広げていたことにある。胡桃沢自身は一九一四年、平瀬麦雨の筆名で『郷土研究』に郷里の民俗宗教・御嶽講を扱った「犬飼山の神おろし」を投稿して以来、柳田に親炙しており、以後、折に触れて同誌に小文を寄せていた。

柳田が胡桃沢の懇懇によって講演のため立ち寄った諏訪から松本を訪れたのは、一九一六年六月のことであった。以後、柳田は再三この地を訪れ、胡桃沢や池上喜作・隆祐兄弟ら多くの郷土史家を知る。

柳田とこの地を引き付けた要因のひとつが、一九一五年に信濃教育会東筑摩部会が着手していた『東筑摩郡誌』、及びその『別篇』の編纂事業であった。当時から柳田は、それまで地方改良運動下で奨励されてきた町村是の在り方に強い不満を抱いており、それに対する反論として想定していたのが、在地の郷土史家によって編纂された内発的な動機による生活史だった。大正期、柳田は頻繁にこの地を訪れ、郷土誌作成の方法に関する講演を行ったほか、書簡によって胡桃沢に細かく郷土調査の進め方について指導を行っている。その指導がほぼ行き渡った頃、この地を訪れ、一連の編纂事業に深く関わったのが橋浦であった。

東筑摩における橋浦の活動はやはり頒布会が大きな比重を占める。一九二九年五月、橋浦は信州松本で「橋浦泰雄君画会」を開催しているが、地域を限定して行われたことから、東京在住の知己は参加しておらず、もっぱら同地域の郷土史家を中心に運営されたものだった。もともと橋浦がこの地を訪れたのは、画家としての景観的な興味が第一の動機だったが、それ以前から柳田を通じてこの土地在住の郷土史家達との間に強い人脈を作っていたことが大きかった。画題もそれまで橋浦が原始共産制の遺制を求めて渉猟した飛騨、越中、

福島に加えて、東筑摩の民俗風景を数多く含んでいた。目録に橋浦自身が「此処に集めた民俗に関する資料は、さうした民衆が時代〳〵に刻んだ記録を、貧しい私の職能によって再記録したものにしか過ぎぬ」と記したように、橋浦の側も民俗学者としての自己を強く意識して会を設計した。かつて橋浦は有島を介して富岡鉄斎の門に入ろうとしたことがあったが、鉄斎の画風に一脈通じる朴訥な道祖神の絵が当日のパンフレットの表紙を飾った。

この頒布会の特色は、橋浦という異郷からこの地を訪れて民俗的な画題を数多く手掛ける日本画家をさらに広く、この地域に知らせようという在地郷土史家たちによる創意が運営に反映された点である。その取り組みは、頒布会の趣意書（「橋浦泰雄君画会趣意書」）にはっきりと打ち出されている。運営の中心になった胡桃沢は趣意書の中で、天明四年の春にこの地を訪れた漂白の民俗画家・菅江真澄に橋浦をなぞらえて紹介し、橋浦の来訪をこの地有志が歓迎した経緯を語っている。

頒布会は当地の郷土史家にもうひとつの波及効果を与えた。それが頒布会終了後の八月、やはり胡桃沢の肝いりで結成された「話をきく会」である。異郷からやってきた来訪者に郷党の有志が集まって話を聞くことを目的としたこの談話会は、多くの民俗学者をこの地に引き寄せた。「此会には、別段面倒臭い主義や主張がある訳ではありません。私達には口交詢と其喜びがあるだけです」とあるように、会は柔軟かつ地方の側が肩書きに拘らない独自の鑑識眼によっ

昭和戦前期における郷土研究の組織化

て客人を遇した。柳田、折口信夫、伊波普猷、箱山貴太郎とともに、笠井茂夫、原田清などの郷土史家が精励に出席していることも、それを裏付けている。

図版 橋浦泰雄による東筑摩郡道祖神のスケッチ  
(裏面に所在地の記載)



「東筑摩郡島立村堀米所在」



「東筑摩郡塩尻町上西条小曾野所在」

同地における民俗学者としての橋浦は信濃教育会東筑摩部会から委嘱を受けた道祖神の記録に多くの時間を費やした。郡内の道祖神を地区ごとに登録して分布図を作成したほか、年代、形態、銘文に

到るまで細かく検証し、必要と思われたものは自ら写真ないしスケッチに残した<sup>⑮</sup>（図版参照）。また、それと並行して「樹木に関する俗信」、「地名に関する俗信」と題した質問表を村落毎に配布し、当該地域で既に知己となっていた調査員に記録を依頼した。ここでいう調査員とは、「話をきく会」の仲間のほか、実際に橋浦が足を伸ばして現地で郷土調査を行っていく過程で知り合った人々を数多く包摂していた。これらの人は本来、民俗学の上で実質的な被採集者といつてよく、その意味でこの質問表の往還は、彼らが自ら住む地域の俗信に関心を持つ、その触発材料を橋浦が与えるという構造を持つといつてよい。<sup>⑯</sup>

ここでひとつ念頭に置いておくべきことは、橋浦の運動歴についてこの地の郷土史家たちはそれを熟知した上で、橋浦を一民俗学者・画家として厚遇した点である。一九三〇年代初頭、橋浦は依然としてコップ傘下の日本プロレタリア美術家同盟（ARのちPP）中央委員長として活動に従事しており、その組織力を買われて北海道その他の地域へ「米よこせ運動」の宣伝活動に派遣されていたが、東筑摩の地において同種の運動を行った形跡がない。有島、柳田への対し方で瞥見したように、ここでも橋浦は自らの領分を弁えて行動していることを窺わせる。東筑摩の場合、それに加えて橋浦が民俗

学者としてこの地に蓄積した人脈、及び個々の知己への配慮が、調査対象としての土地そのものへの敬意となり、自身の信条としてあらわれたと見ることができるといえる。

橋浦の姿勢に対して東筑摩の有志の側もそれぞれ控えめながら、行き届いた配慮を示している。例えば一九三三年二月初旬から四月にかけて県全域を襲った「長野県教員赤化事件」の折、胡桃沢は東京の橋浦に宛てて、今回の事件は松本周辺には県内では例外的に波及しなかった<sup>⑰</sup>ので、安心してほしいと伝えたことなどは、両者の信頼関係の深さを物語っている。また、有賀喜左衛門は当時、プロレタリア文化運動と並行して橋浦が力を入れていた消費組合活動<sup>⑱</sup>について、自分の村で扱える産物があるので、提供を申し出ている。これに限らず、信州の知己を頼って橋浦は画業と郷土誌編纂の合い間を縫って、組合と既に提携した農家を巡回し、東京へ出荷の手続きを行っている<sup>⑲</sup>。時期的に橋浦が当時、東京市内で活動拠点としていた城西消費組合が関東消費組合連盟への弾圧の余波で解散を余儀なくされるのは一九三八年一月だが、明らかに橋浦は郷土史家の容認の許で、これらの活動を行った。

ここから俯瞰できるのは、昭和期に入ってから信州松本とその周辺地域における郷土研究は、地元からの創意によって運営される事業の上に、外側からやってくる研究者が呼応するという、いわば啐啄の関係にあった点である。『民間伝承論』において柳田は、その土地に住む者の内省を繰り返し強調したが、「話をきく会」、ならびに

別表 「橋浦泰雄生誕五十年記念会」概要

氏名	出欠の可否	備考	従前の頒布会発起人経験
守隋一	×		
山口貞夫	×		
西村豊吉 (代理)	×		
松本悟郎	×		
丸岡秀子	×		
野川隆	×		
萩原正徳	×		
みずゑ春鳥会	×		
吉田隆子	×		
橋本福松	×		
末光績	×		1928年
西尾寿造	×		
吹田順助	×		1928年, 1932年
松田解子	×		
井汲越次	×		
瀬川清子	×		
岩村亀吉	×	後に出席	
橋浦増雄	×		
岩黒与三次	×		
小黒武雄	×		
田中若太郎	×		
泉盈之進	×		
穴戸左行	×		
加藤武雄	×		
高橋文太郎	×		
松岡駒吉	×		
小沢正元	×		
大沢保	○		
小林源太郎	○		
半田良平	○		
千金貫事	○		
秋田雨雀	○		1928年, 1930年, 1932年
平林たい子	×		
角田健太郎	○	『御手紙の趣承知いたしました』とあり。	
辻誠	○		
高森捷三	○		
小野沢亘	○		
楠本寛	○		
江森盛弥	○		
皆地理武	×		
千足正濠	○	『大抵出席します』とあり。	
川尻泰司	○		
池田英	○		
福田寧雄	○		
細田民樹	○		
福室松太郎	○		
村山重忠	○		
野村直太郎	○		
大月源二	○		
竹本賢三	○		
大沢弘幸	○		
大森詮夫	○		
芳賀閃	○		
戸田謙介	○		
蔵柳一	○		
和田軌一郎	○		

氏名	出欠の可否	備考	従前の頒布会発起人経験
久留往松	○		
生田ヨシアキ	○		
深谷亮	○		
池上鎌三	○		
若山一夫	○		
木村鶴松	○		
野村信	○		
三角泰	○		
比嘉春潮	○		
有賀喜左エ門	○		
柳瀬正夢	○		
大間知篤三	○		
有田平蔵	○		1929年, 1931年
池上隆祐	○		
福山太吉	○		
須山計一	○		
下田芳雄	○		
中野重治	○		
中込虎一	×		
大田耕士	○		
佐藤八郎	×		
川合仁	×		
岡茂雄	×		
石原龍一	×		
森下石太郎	×		
安本哲子	×		
三浦滋	×		
安成三郎	×		
大藤時彦	×		
桜田勝徳	×		
大島恭子	×		
永田一脩	×		
藤森成吉	×		
竹谷富士雄	×		
早川孝太郎	×		
片岡重孝	×		
渡辺政知	×		
若杉島子	×		
船山信一	×		
白井喬二	×		
小川正夫	×		
新島繁	×		
白石定一	×		
河田英	×		
杉本武夫	×		
門田三三	×		
市谷信義	×		
倉田一郎	×		
塚原健二郎	×		
井上信子	×		
島木健作	×		
茂木由子	×		
島崎六九	×		
田中咄哉州	×		
細川平三	×		
渡辺順三	×		

氏名	出欠の可否	備考	従前の頒布会発起人経験
寺島昌子	×		
アトリエ社	×		
胡桃沢勘内	×		1929年, 1930年, 1931年, 1934年
田村栄太郎	×		
中根孝之助	×		
高野敏史	×		
佐野豊太郎	×		
熊谷辰次郎	×		
江戸喜久治	×		
大島豊	×		
日本学芸新聞社	×		
岩黒義雄	×		
手塚亮	×		
山田きよ子	×		
平田良三・マツ	×		
石黒忠篤	×		
岩波茂雄	×		
神近市子	×		
新居格	×		
三浦薫雄	○		
金井満	○		
山崎今朝弥	○	野村愛正と連名	
佐々木孝丸	○		
高松幸三	○		

「橋浦泰雄生誕五十年記念会」出欠通知（一九三七年）から作成

橋浦の絵画頒布会は、まさにその継ぎ目の位置にあったといえよう。

## 五 橋浦泰雄生誕五十年記念会

一九三七年二月二〇日に行われた橋浦の数え五〇歳を祝う「橋浦泰雄生誕五十年記念会」（以下、「記念会」）は、過去三〇年近くに及ぶ橋浦を中心に展開された交流の堆積を読み取る上でひとつの節目となった。これに先立って三月に行われた「橋浦泰雄日本画頒布会」は、一〇年近くにわたる同種の事業の一到達点ともいえるべきものである。今回は橋浦にアトリエ兼自宅を構えさせるという目的であらかじめ目標額（二千元）を定めた点で、運営主体は橋浦から離れた模様で、発起人に相当する六名の世話人以外に、今回はその下に七三名の賛助員が配置され、より広く購買者が求められた。<sup>23</sup>

それまでの頒布絵がおおむね購買者が五〇名を下らなかったのに対し、この時は約一三〇名がこれに参画した。その結果、同年十一月には杉並区久我山に懸案のアトリエが新築された。一二月の記念会は、その新築祝いを兼ねており、事務方は引き続き頒布会の会計を担当した「木曜会」の主要メンバーが引き受けた。

ここでも際立った結束力を発揮しているのは信州松本の人脈である。特に同年七月の時点で三三名の有志が代表者となった地元の書店大成堂の店主・佐野豊太郎を介して橋浦の絵を注文し、三百三〇円の収益をあげた。<sup>24</sup> 個人としての購入額では最高が渋沢敬三の三〇

○円だった。

「記念会」が頒布会の成果を祝うという性格を持っていたことから、出欠通知の送り先を集計することで、その構成を把握することができる。別表に見るごとく、ここにはこれまで橋浦が積み重ねてきた人的交流の全貌があらわれている。「記念会」が年末近くの開催だったため、地方に拠点をおく郷土史家の場合、胡桃沢勤内や福井の江戸喜久治をはじめとして出席を見合わせた者が多かったことは否めない。しかし野村愛正、白井喬二ら鳥取時代の文士仲間が始まり、上京後プロレタリア文化運動で知り合った山崎今朝弥、佐々木孝丸、須山計一、一九二〇年代後半からの消費組合活動における金井満、下田芳雄、そして「木曜会」その他、一九三〇年代以降本格化する民俗学の組織化を通じて形成された知己という複数の人脈は、そのまま橋浦の閲歴に対応している。

また、出欠の如何を問わず、これまでの頒布会の発起人を務めた人士が招待の対象となっていることは、もともと橋浦の頒布会は途中から後援者が脱退するという事例が稀だったことの証左であり、「転向期」にあたる一九三〇年代に入っても、橋浦を支援しようという人的な繋がりが維持されたことを示唆している。同時代の思想変動とは別個に、その人物の資質をもって交流を続ける尺度とした大正期以来の橋浦の人脈が窺い知れる。

その一方で、招待状の配布先を見る時、柳田国男や渋沢敬三といった頭官をそこに入れないという周到的配慮が示されていることも見

逃せない。<sup>(26)</sup> 当時、産業組合中央金庫理事長の職にあった石黒忠篤、あるいは岩波茂雄などの出版人を例外とすれば、橋浦の閲歴に即して人を選ぶのが「記念会」の運営方針だった見ることができる。

## 六 小括

民俗学の領域で橋浦の組織者としての力量が試されたのが、一九三五年七月末から八月初旬にかけて行われた日本民俗学講習会の会期中、これを機会に郷土研究の全国組織を結成する機運が生まれた時である。この時、全国に支部を持つ組織体の案が出されたが、橋浦はそれに強く反対し、各地で既に研究実績を持つ郷土研究会を横から繋ぐことで、全国組織とすることを提案した。結局、この方針が採択され、新たに生まれた「民間伝承の会」は、以後これを踏襲していくこととなる。

一九三八年以降、橋浦は機関誌『民間伝承』編集長として、自身の活動拠点を「民間伝承の会」に移し、戦時下も同誌を支える。そしてその間も民俗採集事例その他について地方の読者と綿密な書簡のやりとりを行っている。

一九三七年四月の『民間伝承』巻頭言の中で橋浦は、長年自らが研究してきた共同労働に限定した情報交換について有志を募った際、同じ社会観の持ち主であることを参加の必須条件とする点を厳しく諫めているが、この主張は大正期から同時代の政治思潮とは別個に

個人の資質をもって対する橋浦の手法が、戦時下の民俗学の組織化という新たな課題の中で昇華されたものといえよう。橋浦は、自身の人脈から蓄積された方法が、戦時下の思想統制という環境において、十二分にその特色を發揮する場にめぐりあったのである。

柳田の民俗学が地方研究者を従属的立場に追いやったとの指摘は、すでに定まった見方となっているが、そこに至る過程で構築された橋浦の人脈から照射する時、その「体制化」の諸相は今一度、再検討の余地があるといえよう。

#### 注

(1) 橋浦泰雄(一八八八—一九七九)民俗学者・社会主義者。鳥取県岩美郡生まれ。一九二二年、郷里で同人誌『水脈』を創刊して詩・小説を発表。一九二〇年日本社会主義者同盟創立大会に参加。一九二八年、全日本無産者芸術聯盟(ナップ)結成に際して中央委員長。一九二五年以降、民俗学を志して柳田国男に師事。一九三五年、「民間伝承の会」設立に参画。一九三八年—四八年『民間伝承』編集長。戦後、一九四五年に日本共産党入党。また、日本画家としても活躍した。

回顧として集約的なものでは鳥取民俗学会「鳥取民俗」第二号(一九七九年二月号「橋浦泰雄追悼号」)所収の宮本常一「橋浦さんのこと」、橋浦の自伝『五塵録』(創樹社 一九八二年)、拙著『橋浦泰雄伝』(二〇〇〇年 晶文社)。生協運動に対象を絞ったものに河田禎之『城西消費組合』(労働旬報社 一九九一年)、絵画頒布会の資料紹介として拙稿「柳田民俗学の組織化—橋浦泰雄の絵画頒布会に見る—」(『人間学研究』第二号 二〇〇一年三月)がある。

(2) 「橋浦泰雄関係文書」は一九九九年より鳥取県立公文書館に段階的に移送されており、書簡以外については二〇〇四年十一月に完了した。

(3) 橋浦自身は直接に交流をもったうちで、とりわけ深い影響を受けた人物として柳田国男以外に、有島武郎をあげている(一九八九年一〇月二〇日 宮沢總子氏・橋浦泰雄次女から筆者聞き取り)。なお、有島に引き合わされた当時、橋浦は養家の坂田姓を名乗っていた。

(4) 秋田雨雀 『雨雀自伝』(新評論社 一九五三年) 六八—六九頁。

(5) 望月桂 『黒耀会』(『美術家クラブ』一九七三年一〇月号) 三〇頁。

(6) 橋浦泰雄 「一九二一・七・一九—一九三三・一一・一六日以上日記的メモ 一九六九・一・一」より。以下、「日記」と略す。戦後、共産党に入党して以降も、橋浦は自らのことを「マルクス主義者」とは言わず、「コミュニスト」であると言っていた。クロボトキンが絶えず用いた

「無政府共産制」という語句を念頭に置けば、戦後の党活動とは別に橋浦の中で両者は互いに交差するものとして受け止められていたと見られる(前出 一九八九年一〇月二〇日 宮沢總子氏から筆者聞き取り)。

(7) 「小品画会」(謄写版 チラシ)。

(8) 橋浦泰雄 「小品画会覚書」(手書き)。

(9) このうち生田春月は、出京以前から精神不安定となり、鳥取に到る途上、瀬戸内海で投身自殺した。

(10) 「橋浦泰雄作品頒布会について」(パンフレット)一頁。一九三一年当時、折口信夫を中心に設立された民俗学会に批判的な立場を取り、学界から孤立していた柳田国男がこの会の中で折口とともに発起人をつとめていることは、両者の間にあって橋浦の占めた位相を示す点で興味深い。

(11) 一九三二年七月七日付 野村愛正から橋浦泰雄宛書簡。

(12) 一九三二年七月八日付 久保清から橋浦泰雄宛書簡。(一)内引用者。

(13) 柳田国男 「民間伝承論」(『柳田国男全集』第八卷一九九八年)二五頁。

- (14) 胡桃沢友男 『柳田國男と信州』(岩田書院 二〇〇四年) 二八五—二八七頁。伊藤純郎 『柳田國男と信州地方史』(刀水書房 二〇〇四年) は、信州における郷土研究史と柳田民俗学の密接な関わりと、昭和十年代に表面化した両者の郷土把握をめぐる齟齬を詳述している。
- (15) 「橋浦泰雄作品個人展覧会目録」(一九二九年五月 チラシ)。
- (16) 「橋浦泰雄君画会趣意書」(一九二九年 チラシ)。
- (17) 「話をきく会 趣意書」(一九三二年 チラシ) 二頁。
- (18) 同前 「今までの出席者氏名」 八—九頁。
- (19) これらは橋浦の処女出版となった『東筑摩郡道神図絵』として一九三一年、郷土出版社から刊行された。
- (20) 回収された質問表は総計二四〇枚に及ぶ。これらの成果を橋浦は『東筑摩郡誌別篇』に活用しようとした節がある。
- (21) 一九三三年三月—四日付 胡桃沢勲内から橋浦泰雄宛書簡。
- (22) 一九三三年六月六日付 有賀喜左衛門から橋浦泰雄宛書簡。「美は前から貴兄の關係しておられる消費組合の話は池上君「隆祐」からも聞いておりますが、小生の村で非常に良質の鯉が沢山ある故、それを取引して頂きたいと思っておりますが如何でせう。小生の村では殆ど各戸に池があり鯉を飼っております。今迄辰野に一軒鯉の問屋があって、その手を通じて出しておりましたが、何しろモノポリーなのでいつも非常に安く、殊に最近ではまるで安いので飼ふ張合ひもありません。それが相当に取引せられるなら、村の人はこんな時世故非常に喜ぶと思ひます。
- (以下略)「」内引用者。
- (23) 橋浦泰雄 「日記」 一九三四年三月五日、同三月十三日。
- (24) 「橋浦泰雄絵画頒布会趣意書」(チラシ)。これと前後してかつての全日本無産者芸術聯盟の仲間達の間で、自宅ないしアトリエを構えさせる資金作りのための絵画頒布会が行われていた。「岡本唐貴救済作品頒布会」(一九三六年五月)、「大月源二作品頒布会」(一九三九年二月)、「松山文雄・前島とも子絵画頒布会」(一九四〇年五月)などが該当する(拙稿 「旧無産者芸術運動家による戦時下絵画頒布会」 『早稲田大学文学研究科紀要』第四九輯 二〇〇四年二月)。
- (25) 「橋浦泰雄日本画頒布会 収入」(手書き原稿)
- (26) 中野重治の回想によると、中野が柳田國男の姿を初めて見たのは、この会の席上だったが(「折り折りの人」『中野重治全集』第一九卷 筑摩書房 一九九七年 三三三頁 初出『朝日新聞』一九六七年十一月二〇日)、出欠通知を送る段階で柳田はリストから外された公算が高い。
- (27) 橋浦泰雄 「縦の組織についての一試案」(『民間伝承』一九三七年四月号) 一頁。
- 小論は平成一五年度早稲田大学特定課題研究助成費(課題番号二〇〇三A—八二二六)、ならびに平成一六年度科学研究費(基盤研究(C))による成果の一部である。

日本無産者芸術聯盟の仲間達の間で、自宅ないしアトリエを構えさせる資金作りのための絵画頒布会が行われていた。「岡本唐貴救済作品頒布